

留学記

パリ



西川良一

私のパリの初めのホテルに同志社時報三冊が届けられた。見るとドイツ・ベルギー・英国の留学の記が松本、天野、児玉、今井の諸先生によって楽しい思い出として書かれている。僕もパリにいるかぎり一文を寄せる義務があると感じて日誌の中より抜粋した。

僕のフランス印象の記の第一頁は英国の児玉先生とは反対の喧嘩失敗の巻で甚だ察覚が悪い。

パリーのソルボンの前のホテルに着いたのが四月の三日、大学の開講には二週間あるし、これから半月をどうしてやろうかなあ!! と思ってホテルより程遠からぬルクサンブルグ公園の堅琴の女——ペリアア——の像の前で椅子に腰をおろしたのがフランス訪問の第一歩である。すると一人の乞食風の老婆がムッシューと言って「三〇サンチーム出せ」とつめよったので、僕は「おや、もう乞食がゆすりに来たわい。ウツカリしたら駄目だぞ!!」と思って「金は一文もない」というと、彼女は「お前はジャポネか? カンパニヤール(田舎者め)」と言ったので、僕は「お前こそ、メッシュヤント(意地悪婆さん)」とやり返してや

ると、今度は彼女は公園の巡査を連れてきて僕をのしった。それで僕は巡査に「なぜ乞食に金を無理に出さねばいけないのか」というとポリさん曰く「椅子代だよ。パリを歩く場合は一フランを持って歩くようにパリーの市民令条では決められている」とのことだった。僕はそれで「無料の椅子は公園にないのか?」と問うと「木のベンチなら、ハ」と教えてくれたので、パリーの公園で休む時は以後一切、木のベンチにしている。……パリーは金のかかる処だ。

そのポリさん、なかなか親切な(ボン・アマチエ)人柄の御人で毎朝、公園の乞食(パリーではクロシャール「clochard」とよんでいる)と握手をかわしている、その情景を写真に思っって「もう一度握手を乞食としてくれ」と言っってカメラを向けると、彼は僕に大声で「馬鹿者めが!! 眞実は二度あるか!! La vérité est une seule fois!!」といっって呶鳴った。これには僕も、グウの音も出なかった。……失敗の巻である。

さて四月十八日より講義が始まった。大使館文化部の推薦状をもって行ってサル・ド・

プロフェッショナルの研究室を貰って色々な人から温かく迎えてもらってうれしかった。講義をのぞいてやろうと思つて教室を学生に聴くと「アンフィ」と言つたので階段教室へ行つた。講義が終わるとプロフェッサー氏が「君はこの教室は初めてか?」ときいたので「そうだ」と言つたと「学生は君になんと言つたか?」と言つたので僕は「学生はアンフィと言つたので、アンフィ・テアトロと思つてこの階段教室へ来た」と言つたと「そうだ。多くの人はアンフィでまじついで、うろろろするが以前のフランス語の実力は十分だ」と褒めてくれたので「それは僕の實力ではない、カン、だ、(persuade)」と言つてやつた。……成功の巻である。

パリで会つた三人の同志社人は、次のオリンピックのフェンシングの出場選手でパリーの体育学校へ留学している田淵一彦君とオランダのライデン市の博物館の東洋文化部長オーエハンド教授夫人のマダム楠さん、東京銀座で「幸画廊」を開いている善田正男君である。田淵君(経済学部出身)は国際的な選手、マダム楠さん(英文科出身)はオランダ

の文化関係では有名人、善田正男君(経済学部出身)はパリーの超一流の画廊、例えば「ダビッド」とか「マギー」などではその名がよく知れわたつてゐる国際的美術商である。いろいろいと筆者は厄介になつたが、会えば同志社の懐しい学生時代に話の華を咲かせ、パリーのカフェ・テラスでコーヒの香に舌鼓を打ちながら時間のたつのを忘れてさせてくれた。……三人の同志社人。

今、この拙文を私はパリーの「レヂエニユルパルシエール大学都市」の「レヂエニユルパルシエール仏英館」のホテルで色々な国の学生と寝起きを共にしながら書きました。同志社の発展を祈りつつ。(経済学部教授・商業経済論)

西川教授の現住所は次の通り

No. 16 Chambrey

Le Collège Franco-Britannique

9 Boulevard Jourdan

Paris 14e, France.

同志社時報合本用ファイル

コメント合本ファイルができました。時報をいつまでも保存するために、ぜひ、お備え下さい。十二冊入り。ご入用の方は左記へお申し込み下さい。(一冊)とも一三〇円

京都市上京区烏丸今出川東入ル

同志社時報編集部

